

---

# 美緒の日常

たっくー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

美緒の日常

### 【Nコード】

N6233C

### 【作者名】

たつくー

### 【あらすじ】

オレの名前は倉持美緒。女の子みたいな名前だけどれっきとした男だ。そんなオレとブラコンの姉、かつこいいけどちょいホモっぽい友人達で織り成すドタバタコメディー。

## ブローグ

ピピッピピッピピッ

カーテンの隙間から朝の光が顔を照らす。

「ん〜…」

ピピッピピッピピッ

さつきからうるさい物に疎ましく思いながらもいつも通り手を伸ばす。

カチツ、と音が止む。

おはよう。オレの名前は倉持<sup>くらもち</sup> 美緒<sup>みお</sup>女の子みたいな名だけれどれっきとした男だ。私立鳳虎学園<sup>ほうこがくえん</sup>生徒数二千人のマンモス高に通っている高校二年である。そして、先ほどの違和感というか奇妙な布団の中をチェック!!

「……………」

そこには本来あってはならないもの、いや居てはならない者が居ただのだ。

「な、何でオレの布団の中にいんの!? 素姉!?!」

「ん〜、みー君もう少しだけ〜」

「つーが早く起きろ!! そしてどうやって入ってきたの!?!」

「ふふつ、私にできないことはないわ」

「はあ～～～」

嫌でも溜息がでて来てしまう。

（この姉はあ～）

また心の中で溜息。

そっだ紹介しよう。

この奇怪なことをしていた人は一つ上の実の姉である。

名前は倉持くらもち 棗なつめ同じ学園に通う高校三年である。学園一の美少女と言われるだけはあつて容姿端麗、おまけに頭脳明晰、スポーツ万能、生徒会長も務めるという非のうちのどころのない完璧超人なのだが、欠点というか問題が一つだけ……なんつーかブラコン？って言うの？それさえなければ尊敬できる自慢の姉なのだが…。

「ねえみー君、今私のこと考えてなかった？？ねえ、ねえ！！」

嬉々として聴いてくる姉。（棗姉微妙に鋭い）

「あつ、みー君早く準備しないと遅刻しちゃうよ？？」

「や、やばい！！もうこんな時間かよ！！！！」

（あ～、朝からほんと疲れる～）

## プロローグ（後書き）

初めて書く小説です。まったり更新で頑張りますので、感想・評価などしていただけると嬉しいです。

## 第一話 朝の日常（前書き）

やっぱり上手く書けないですね。それでも読んでもらえると嬉しいです。

## 第一話 朝の日常

どうも、オレこと倉持美緒です。いやーあれから急いで準備したかいがあり今は姉とのんびり歩いて学園へと向かってる途中なわけです。それにしても。

「いつも思っけどやっぱり棗姉人気あるんだなあ」

「ん？何唐突に？」

「皆棗姉を見てるんだなと思ってね」

「本当にそう思ってるの？」

「え？う、うん」

「はあ」

何か物凄い呆れた目でみられながら溜息つかれたんですけど。けどね姉が人気があると思ってしまうのは仕方ないんですよ。なんせさつきから同じ学園の生徒達がこっちを見ながら（特に女子が）目を輝かせて“可愛いー”とか、なぜか“萌”とよく判らない言葉を言ってるんですから。

（んゝさすがに棗姉と一緒にいるからもう慣れたけどね。でも何で毎回棗姉は体中から殺気を飛ばしてるんだ？？今だに判らん）

- - 棗 Said - -

んゝ、みー君と一緒に居れて幸せだわ。もう少しゆっくり歩こうかしら？それにしてもやっぱりいつ見てもみー君は可愛いわね。まる

で“天使”だわ！！ぱっちりとした目、小さいは鼻、そしてしゃぶりつきたくなる唇！！おっといけない！いついっ口が滑ってしまったわ。まあそれくらい可愛いつてことよ。

（でもこの周りの女子達は煩いわね。）

「いつも思っけどやっぱり棗姉人気あるんだなあ」

「ん？何唐突に？」

「皆棗姉見てるから凄いと思ってね」

「本当にそう思ってるの？」

「え？う、うん」

「はあ」

（まったくこの子は）

鈍感にも程があるわね。そんなところも可愛いんだけど。まあだからこそ私はハイエナ共からみー君を守り、そして私がみー君をいただくわ！！

そんなこんなでいつも通り学園へと到着した。



## 第一話 朝の日常（後書き）

美緒〓み 棗〓な

み「どうも！！今回から次回予告や裏話等を僕達がやっていきます」

な「ただのサボリじゃない」

み「まあまあ、

二人で頑張ろうよ」

な「そうね、愛し

合う二人で頑張しましょう」

????「美緒は俺のだぁー」

み「はぁ」

な「面倒だからこの辺で今回は終わしましょう」

み

「じゃまた」

????「え、もう！？くそー」

## 第二話 悪友！？登場の日常

どうも、美緒です。今は姉と別れ自分の教室の前に着いたところです。教室は先に昇校口で貼り出された組表で確認済みだ。因みに三組だった。

（知ってるやつ居ると良いけどなあ）  
ガラッ

教室へと入り自分の席へと向かう。  
ダダダダダッ！！

「とうっ！！」

「??」

ドスッ

いきなり背中から物凄い衝撃が襲って来た。

「ぐげっ!?!」

誰か知らんが全力疾走してきた勢いのまま背中に抱き着いたのだ。  
（こんな事してくる奴はあいつしかいねえ）

「美緒」

「や、やめろ。ほお擦りなんかしてんじゃねえよ!!」

「怒った美緒も可愛いなあ」

ゾクゾクッ

(ヤバイ本気で寒気が)

「さ、さっさと離れやがれ幸樹!!」

「いゝやゝだ」

ドゴッ

ガスッ

グチャ

「ふゝ。やっと離れたか」

まあ一応紹介しておこう。さっきオレに抱き着いてきた迷惑窮まり  
ないやつは、中学からずっと同じ組で所謂悪友ってやつだな。名前  
は宮坂<sup>みやさか</sup> 幸樹<sup>こうき</sup>運動神経もそこそ良いし、なにより見た目がめっちゃ  
くちやイケメンだ。

(まあ頭は悪いけどな)

なので女子によくモテる。だがそれは普通にしていればの話しだ。周  
りもこいつの異常を知ってるから告るなんてしないだろうがな。

ガラッ

「ほらあゝ席に着けゝHR始めるぞ」

当然のように担任も幸樹を無視。いつそ清々しいくらいだ。因みに  
この2・3の担任はオレと幸樹の一年の時の担任でもある。だから  
こそ幸樹を気にもしないんだがそれはそれでどうかとも思う。

「ああ、出席とるの面倒だからお前ら体育館にすぐ行け」

おいおい適当だな。とか考えながらオレも他の奴に続いて始業式に出るため体育館へ向かった。一人教室に置いてかれる幸樹

「みんな〴〵置いてかないでくれ」

半泣きになりながらも急いで後を追っていく。

## 第二話 悪友！？登場の日常（後書き）

美緒「み 幸樹」こ

こ「やったぜ！！今年も美緒と

一緒だ〜〜！！」

み「はいはい。これで5年連続だね。」

ちが凄いからだな〜！！」

こ「きつと俺達の愛し合う気持

み「キシヨッ」

こ「ちよつと、

それは酷くない！？」

み「全

然、だって本当のことだし」

こ「す、少しぐらい否定してよ」

み「人間やつぱり嘘はいけないよね」

こ「うわあああん〜！！」

み「ああ泣

いちゃった。ま、ほつとこ。次回は…」

??「ついに

私の出番ね〜！！」

み

「だ、誰！？」

??「次話で判ることよ。

では今回はこの辺でまた〜」

### 第三話 始業式の日常（前書き）

更新が遅れて申し訳ないですf^\_^| ^.^なのでちょっと長めになりました。

### 第三話 始業式の日常

「なあ、なあ美緒」

「……………」

「美緒ちゃん」

「……………」

「ぐっ、ぐすっ」

「わかったから泣くなよ幸樹」

どうも、真面目に始業式に参加してるのに幸樹に話しかけられうんざりしてる主人公の美緒です。

（何でこいつはいつもこうなのだろうか）

少しはおとなしくいうものが出来ないのだろうか

「で、何なんだ幸樹？」

「今日の始業式の最後に新しい理事長の紹介があるらしいぞ」

「へえ」。まあ、どうせ年寄りだろ」

「それが違うんだって！！若い女の人らしいんだ」

「ふん」

「何だよ、興味ないのか？」

「まあオレにはあまり関係ないしな」

「面白くない反応だな」美緒ちゃんは

「ちゃん付けは止める！！何度言ったらわかってくれるんだろうな」。  
「ねえ、こ・う・き君？」

ゴゴゴゴゴゴ

（み、美緒の後ろに修羅が視える）

『生徒会長からの挨拶』と、司会をしている生徒会委員の人が言った途端に周りの話し声が無くなった。美緒も殺気を消しステージ上にある台へと意識を向けた。

（た、助かった。美緒の奴マジで恐かったぞ）

（そういえば、棗姉は新しい理事長のこと何か知ってるのかな？なんか嫌な感じが）

そんなことを二人が思っている内に棗が壇上に上がった。

（あ、みー君見つけ。可愛いなもう）

と、思っている間も決まりきった挨拶を述べ壇上を後にする。



『では、式を終了する前に新しい理事長の紹介と挨拶をお願いします。』

新しい理事長が壇上へと上がる。

「!？」

思わず自分の眼を疑ってしまう。信じられなかった。

「なあ、あの人美緒のお母さんじゃ……」

何故、新しい理事長として来たのかわからないが

（嫌な予感の中かあ）

と心の中で呟いた。「あはようございます。新しくこの鳳虎学園の理事長に成りました。倉持くらもち 麻那まなです。どうぞよろしく。」

棗姉を見ると何も聴いてなかったようで眼を丸くしている。

（棗姉も知らなかったのか）

なら自分が知り得るわけがない。

生徒会長ということもありいろんな情報を知っている。

それこそ、盗聴器でも仕掛けてるのではないか？というくらいだ。理事長もとい母が壇上から降りる。

否、途中で止まった。「あ、みーちゃんとなっちゃんはこれが終わったら理事長室に来るように」

と、言って理事長室へと帰って行った。

「はあ」

溜息がでる。また厄介な。そう思うも式の後母に逆らう訳にいかず理事長室へと向かう。

（頑張れオレ！！）

自分を励まし、途中で棗姉と合流し足速に進む。

### 第三話 始業式の日常（後書き）

美緒「み 棗」な 麻那「まみ」なんか母さんまで出て来てこの先  
どうなるんだろう」

な「安心しなさい所詮は理事長よ。そうそう出番なんてないわ」

ま「なっちゃんたら酷いわ。おおよ

よ  
み「棗姉いくらなんでも酷い

と思うよ  
ま「ああ、なんて優しいの

かしら。さすが私のみーちゃんね！お礼にちゅーしてあげる」

み「いらないから離れてよ」な

「そうよさっさと離れなさい！！いくらママでも許さないわよ！？」

ま「もう、しょうがないわねえ」

み「はあ。もう疲れたから今回は

この辺で、じゃまた」な「じゃまたねえ」 ま「それ

じゃまた」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6233c/>

---

美緒の日常

2010年10月9日13時01分発行